

# 「不易」と「流行」 誠実・克己・忠恕

～どうにもならないことを忘れるのは幸福だ！！～

住友生命の社長、会長を務められた故・新井正明さんは、召集令状により、第二次大戦に出兵、1939年に起きたノモンハン事件で片足を切断されました。絶望のどん底にあった新井さんを救ったのは安岡正篤先生の著書『続経世瑣言（けいせいさげん）』の一節でした。

私は父が安岡正篤先生を尊敬していましたから、先生の本を読むように、講義を聴くようにと、随分勧められましたが、まあ、当時若干、生意気であったし、先生があまり偉すぎたものですから、近づかなかった。

それで、ところが、ノモンハンで右脚をなくし、陸軍病院へ入っている間、先生の著書を一所懸命に読みました。その中から、今後どう生きていけばいいかというようなことを徐々にですが、悟ることができた。悟るといって、大げさですけども……。

退院して会社に戻ったわけですが、兵隊に行く前は九か月しか会社におらなかったから、戻っても仕事ができないのですね。おまけに当然のことだけれども、行動が鈍い。

同僚に比べますと、昇給が遅い。ボーナスが少ない。こういう時期が2、3年続きましたかな。そういう中で、安岡先生の、『続経世瑣言』の中にある、「忘（ぼう）の説」という箇所が目にとまったわけです。

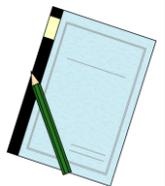
**「どうにもならないことを忘れるのは幸福だ」**

という諺（ことわざ）がドイツにあるんですけども……

またカーライルが、「**忘却は黒いページで、この上に記憶はその輝く文字を記して、そして読みやすくする。もしそれがことごとく光明であったら、何にも読めはしない**」ということを行っているわけですね。

先生はそれを受けて、

**「我われの人生を輝く文字で記すためには確かに忘却の黒いページを作るがよい。」**



**「いかに忘れるか、何を忘れるかの修養は非常に好ましいものである。」**

こう言われているわけです。これだなと思った。過去のどうにもならんことを忘れなければならない。召集令状さえ来なけりゃよかった。来ても即日帰郷になればよかった。戦争に行っても弾に当たらなけりゃよかった……。こういう過ぎてしまったことをいろいろ考えてみたって、実際はどうにもならんわけですね。いくら、言っても元へ返らない。そうなることを忘れ去って、今日だいまから将来を切り開いていかなきゃならないという気持ちに到達したわけです。だけど、時にはやはり、あの時はあれがなきゃよかったということもあります。ありますが、いまから考えると、そういう体になったのは一つの宿命である、と。

安岡先生はよく運命というのは自分で切り開いていけるけれども、宿命というものがあると。私はそういう宿命を負った。そしたら、これからの自分の運命はどう開いていったらいいだろうかということです。

『致知』1985年11月号『1日1話、読めば心が熱くなる365人の仕事の教科書』

過去のどうしようもないことにこだわり続けて、言い訳にしているませんか？〇〇がこうだったらよかった。あのとき〇〇しとけばよかった。〇〇になってなければ……

「日本のペスタロッチ」と呼ばれた、兵庫県の偉大な教育者、東井義男先生が生前、君たち若者に次のように講演されています。「近頃ね、日本人の男子の平均寿命、だいたい73歳になったようですが、この間まで72歳でした。人生72年を1日24時間に当てはめてみましょう。36歳がお昼。私は22時、余りが2ですが1時間の3分の2は40分。私は、今年後10時40分のところへきている。残りはこれだけです。残りこれだけをどう生きるか、その責任者が私です。ところが……君たち18歳の少年は……3で割ると「6」でしょ！午前6時！これから1日が始まっていくんです！」

君たちは、まさに目覚め、1日が始まったばかり！過去（これまでの失敗や自分への決めつけ）にとらわれず……これから……この一日を良い一日に！この一生を良い人生！にすることができるのです！高校時代時は黒いページを作る時かもしれませんね。いっぱい悩んだり、失敗したり、苦労したり……そして大人になった時、それらを活かして、**輝くペンで黒いページに輝く文字を記してください。**